

令和 6 年度総合教育会議議事録

1. 日 時 令和 7 年 3 月 13 日 (木) 10:00～11:30
2. 場 所 島根県立男女共同参画センターあすてらす 3 階 研修室
3. 出 席 者 大田市長 楫野 弘和
教育長 武田 祐子
教育委員 梶 伸光
教育委員 仲野 義文
教育委員 岩谷 律子
教育委員 景山 浩充
教育委員 宮里 陽子

(事務局職員)

政策企画部長	下垣 英樹
教育部長	森 博之
子ども保育課長	吉田 貴宏
教育部総務課長	縄 和仁
学校教育課長	俵 拓夫
学事・魅力化推進室長	山根 あずさ
社会教育課長	岩谷 和美
石見银山課長	大門 克典
学校給食センター長	後藤 裕之

4. 傍 聴 者 29 名

5. 会議内容

テーマ

「こどもたちの意見を取り入れる学校教育、地域づくりについて」

【開会】

森 教育部長

ただいまより大田市総合教育会議を開会いたします。

それではまず、本日まで出席の皆様を紹介させていただきます。

～出席者の紹介～

次にこの会議についてご説明申し上げます。

総合教育会議は、平成 27 年度から「市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、大田市の教育の課題やあるべき姿を共有し、取り組みの方向性を共有すること」を目的に開催してい

るものです。

本日の会議は概ね 11 時 30 分までを予定しています。

なお、会議は公開としておりますので、ご覧のとおり多くの方にお越しいただいております。ご出席の皆様におかれましてはご承知おき願います。

今年度のテーマは「こどもたちの意見を取り入れる学校教育、地域づくりについて」とさせていただきます、ご議論いただくこととしております。

それでは、開会にあたり楫野市長からごあいさついただき、以降の進行をお願いいたします。

【市長あいさつ】

楫野 市長

今年度も大田市総合教育会議を開催いたしましたところ、教育委員のみなさまには、年度末のたいへんお忙しい中、会議にお出掛けいただきありがとうございます。また、平素から大田市の教育行政の推進にご尽力いただき感謝申し上げます。

これまでもさまざまなテーマでご議論いただいておりますが、今日の会議は、「こどもたちの意見を取り入れる学校教育、地域づくりについて」をテーマといたしました。私たちの未来を担うのはこどもたちでございます。このこどもたちの意見を取り入れることは、学校教育や地域づくりにおいて非常に重要なことだと思っております。後ほど説明させていただきますが、大田市の様々な計画づくりに際しては、アンケート等でこどもたちの意見を聞いております。それをいかに計画に反映させていくかということが、我々の責務になっていると感じています。

学校教育におきましても、こどもたちが自らの意見を表現できる場をよりいっそう設けていくことが重要だと考えております。そして、地域づくりの面におきましても、こどもたちが地域の一員として参加できる機会を増やしていくこと、そして、地域の課題解決に向けたアイデアを出し合う場を提供していくことが求められております。

私たち大人、特に私のような昭和世代の者は、こどもたちは、周りの大人が面倒をみるものであるという感覚が強かったのですが、今は一人の人として向き合う姿勢が求められています。こどもたちの意見を尊重し、彼らが安心して意見を述べられる環境を整える責務があり、こどもたちの声を大切にしながら共に成長できる地域社会を築いていきたいと思っております。

本日は限られた時間ですが、忌憚のないご意見を伺わせていただき、今後の取り組みに繋げていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速ですが本日のテーマ及び資料について、事務局から説明をお願いします。

【テーマ及び資料の説明】

森 教育部長

本日のテーマについて説明させていただきます。

令和 5 年 4 月に施行された「こども基本法」は、全てのこどもが、将来にわたって幸せな生活を送ることができる社会の実現を目指し、こども政策を総合的に推進することを目的としています。

第 3 条に 6 つの基本理念が掲げられており、その中には「年齢や発達の程度により、自分

に直接関係することに意見を言えたり、社会のさまざまな活動に参加できること」、「すべてのこどもは年齢や発達 の程度に応じて、意見が尊重され、こどもの今とこれからにとって最もよいことが優先して考えられること」とあります。

また、第 11 条には「国及び地方公共団体は、こども施策を策定し、実施し、及び評価するに当たっては、当該こども施策の対象となるこども又はこどもを養育する者その他の関係者の意見を反映させるために必要な措置を講ずるものとする」とあります。

すべてのこどもや若者が、将来にわたって幸せな生活ができる社会を実現するためには、こどもたちが教育や地域社会に主体的に関わり、その意見や考え方が反映される機会や仕組みを、家庭、学校、地域、行政が一体となって作っていくことが求められます。

学校教育で申し上げますと、こどもたちが自らの考えを表現し、学びのプロセスに参加すること、例えば、学校の魅力づくりについて先生とともに考えることや、生徒会活動などを通じて意見を発信する機会を設けることなどが考えられます。

地域づくりでは、こどもたちが地域のイベントや活動に積極的に参加し、自らの意見を述べることで、地域の課題解決や活性化に寄与することが考えられます。

また一方では、こどもたちが自分自身の考えをしっかりと持ち、他者と意見を交換しながら協働で学ぶことのできる力を育むことや、自分の意見が尊重されると感じることで、自己肯定感や学習意欲の向上につながることも期待されます。

こどもたちの声を大切に、彼らが未来を切り拓く力を育むとともに、より良い教育や地域づくりを進めていくために何をすべきなのか、どのような環境を整えていくべきなのか、また、市としてどのような取り組みに力を入れていくべきなのかについてご議論いただくとともに、傍聴の皆様も一緒になって考えを深めていくことを目的として、本テーマを設定させていただいたものです。

吉田 子ども保育課長

私からは、「①大田市こども計画について」と、「②子育て拠点施設をはじめとする大田市の取り組みについて」説明させていただきます。

まず、1 点目の大田市こども計画について説明します。はじめに、こども家庭庁の設立についてお話しします。

国は、令和 5 年 4 月 1 日、常にこどもの最善の利益を第一に考え、こどもに関する取り組みや政策を日本社会の真ん中に捉える「こどもまんなか社会」を掲げ、こどもの視点で、こどもの権利を保障し、こどもを誰一人取り残さず健やかな成長を社会全体で後押しを行う機関として、こども家庭庁を設立しました。

また、同時に、全てのこどもが個人として尊重され、適切な養育や生活の保障、意見の表明機会の保障、こどもの意見の尊重や最善の利益の考慮、子育て環境の整備などを基本理念として掲げ、こども基本法が施行されています。

さらに、こども施策を総合的に推進するために、令和 5 年 12 月 22 日には、こども基本法に基づく「こども大綱」が定められ、閣議決定されています。

国は、この「こども大綱」をもとに「こどもまんなか社会」を目指し、全てのこども・若者が身体的・精神的・社会的に幸福な生活を送ることができる社会を目指しています。

大田市としても、子どもたちの健やかな成長と子育てを社会全体で応援するまちづくりを目指し、子ども・子育て支援施策を進めてきたところです。

今年度は、誕生前からの切れ目ない支援や、貧困対策、成長過程にある全てのこども・若者の健やかな成長と自立支援などを包含し、こどもの意見を取り入れた、子育てを一体的に支援するための「大田市こども計画」を策定しています。先ほど説明した国の「こども大綱」や、島根県の「しまねっこすくすくプラン（島根県こども計画）」を踏まえた計画としています。

この計画を策定し、施策に反映するため、小学5年生、中学2年生、高校2年生等のこども達へ「こどもの権利や居場所などについて」アンケートを行うことでこどもたちの意見を聞き、計画の策定を行ってまいりました。せっかくの機会ですので、集計したこどもたちの主な意見を紹介します。小学生、中学生、高校生に共通して、気軽に相談できる場所があれば良いという意見が多くありました。小学生では、登下校時に大人の人に見守ってほしい、大人にもっとこどもたちの意見を聞いてもらいたいという意見がありました。中学生では、地域の人たちと思いを共有できる場があると良い、こどもの意見を聞いてほしい、こどもたちを大切にしてほしいという意見がありました。高校生では、すべてを受け止めてくれる大人がいてほしい、地域の人と交流があると良い、小さいこどもたちが遊べるような施設があると良いといった意見が多くありました。遼摩高校や大田高校でワークショップを行ったり、個別に意見を聞く機会を設けたりもしております。

これらの意見をもとに大田市こども計画の策定を行っています。この大田市こども計画を基に、今後の大田市の子ども・子育て支援施策を進めてまいります。

2 点目の子育て拠点施設について説明します。

大田市の公共施設は老朽化などの様々な問題が生じている状況であり、そういった施設の見直しを図っていく中で、現在課題となっている子育て世帯の孤立対策や、子どもの発達に対する支援の複雑化などについて、より良いサービスを提供していきたいという考えで昨年度、整備基本計画を策定しております。

まずは「おおだ子育てにかかる総合支援拠点施設のあり方」についてです。

拠点施設整備における基本理念は『子どもたちの笑顔があふれ、みんなが夢を抱けるまち“おおだ”をめざす拠点づくり』としております。

拠点施設整備については、次に挙げます4つの機能を1施設で有するという形で、整備を進める予定としております。

まず1番目は、＜幼保連携型認定こども園＞です。大田保育園と大田幼稚園の2施設を統合し、幼保連携型認定こども園として整備します。現在行っております、幼児教育・保育、休日保育や一時預かり事業なども継続して行っております。

2番目の＜基幹子育て支援センター＞については、現在、大田市内にはあゆみ保育園と仁摩保育園、公立では温泉津保育所で実施している子育て支援センターがあります。それらの既存施設については引き続き事業を実施するとともに、連携機能を強化していきたいと考えており、基幹的な役割を担う子育て支援センターを新設したいと考えております。子育て中の親子の交流の場の提供や子育てに関する相談、援助の実施、また、地域の子育て関連情報の提供なども行っております。

3番目の＜こども家庭センター＞については、現在大田市で設置しております「子ども家庭総合支援拠点」、それから「母子健康包括支援センター」の機能を併せ持つ、「こども家庭センター」として機能統合したものを設置します。すべての妊産婦・子育て世帯・こどもの

包括的な相談支援の実施や児童虐待への対応など、多様な家庭環境等に関する支援体制の充実を図ってまいります。

4 番目の〈保健センター〉については、温泉津保健センター、仁摩保健センターの機能を移転して、改めて拠点施設に保健センター機能を置きたいと考えております。乳幼児健診やがん検診、健康づくり活動の推進や感染症対策（予防接種等の実施）などを行ってまいります。

説明しました 4 つの機能を連携させることで、子育て世帯等への支援に繋げていきたいと考えています。

今後の事業のスケジュールについてです。

現在、実際の施設の建設に向けた作業に入っております。今年度は建築基本設計を行っており、施設の平面配置やコストの検討を進めております。来年度に建築実施設計を行い、令和 8 年度から 2 か年かけて施設を整備し、令和 10 年度からの供用開始を目指したいと考えております。整備する場所は、駅の南側、新庁舎が建つ場所の隣です。虹のホールの少し南側に位置します。

施設の基本方針は、「利用者の利便性が高く、交流・相談の場となる施設」としております。現在は個別に展開している事業を複合化することで、事業の連携を促進し、利便性の向上を図りたいと考えております。また、分散している相談先を集約し、子どもに係る相談を全部まとめてワンストップで対応できるようにしたいと考えております。併せて、利用者同士の交流や情報交換、情報共有が図られるスペースの確保や、雨の日や猛暑の日でも使える大型遊具を設置したプレイルームなど、普段から利用しやすい、訪れやすい施設とすることで、来訪することのハードルを下げ、行政に対して日常的な相談を行いやすい環境を目指しています。

子ども・子育て世代に寄り添ったきめ細やかなサービス提供、施設内外の動線の確保、新庁舎との接続、関係機関との連携や利用しやすい開館時間などを今後検討してまいります。

たくさんの方のご意見をいただき、利用しやすい施設を目指し取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

山根 学事・魅力化推進室長

拡大生徒会等の教育委員会の取り組みについて説明させていただきます。

教育委員会では、市内に 6 校ある中学校の生徒会役員が一堂に会して意見交換をすることで、生徒同士が互いに刺激しあい、それぞれの学校の生徒会活動をより良くしていこうとする意欲の向上を目的として、令和 4 年度から大田市中学校拡大生徒会を開催しております。

令和 4 年度はコロナ禍であったためオンラインで開催しました。参加した生徒からは、「次回はぜひ同じ会場にみんなで集まって、一年間どのように生徒会活動に取り組んだか発表したい」、「他校の取り組みを聞くことができて参考になった」、「自分の学校にも取り入れたいアイデアであった」など、たくさんの感想をいただきました。

令和 5 年度の開催を計画するにあたり、各校の生徒会役員が一つの会場に集まることを機会に、各校の取り組みを知っていただき、今の中学生の思いや意見を、教育委員や市議会議員をはじめとする大人のみなさんに直接聞いていただき意見交流をする場にしたいと考え、2 年目となる令和 5 年度から狙いを 1 つ追加し、会場も議場をお借りして、生徒と大人達が直接対面で意見交換を行うことができる場として開催しました。当日、生徒は、教育委員、

市議会議員をはじめ、市長、副市長も同席のもと、多くの大人たちと直接意見交換を行うことができました。生徒は、慣れない議場で緊張の中ではありましたが、堂々と発表していました。開催後、生徒からは、「普段なかなか出会うことがなく、話す機会のない市長や議員と直接意見交換ができてすばらしい経験となった」、「緊張したが議場という特別な場所で発表ができて自信になった」、「今後も続けてやってほしい」などの感想がありました。

そして、3回目となる拡大生徒会を先月2月14日に昨年度同様に議場で開催しました。新体制となったばかりの新役員に、各学校の生徒会一押しの取り組みの発表をしてもらいました。発表の後の質疑、意見交流では、大人からの「小規模校ではやっていると聞いているが、大規模校は地域との交流をやっているのか」という質問に対し、一中生徒から、「久利で芋を植える活動や、三瓶でユウスゲを植える活動をした」という回答や、「中学生は地域を巻き込むことができる力があると思うが、何かできそうなことはないか」という問いに、「地域を巻き込むのであれば小さい子から高齢者まで巻き込むことができた方が良い。こども食堂を大きな規模でできたら良い。その場で展示の機会が少ない生徒の作品などを展示しても良いと思う」という大田西中の生徒からの回答などがありました。また、生徒間での意見交換では、「他校と一緒に体育祭がしたい」、「三中をもっと知ってほしい」という意見に、「二中の一押しの取り組みである『つながる』が実現できそう。一緒にやってみたい」といった今後の学校間の連携につながる意見もありました。また、市への要望として、「校舎の建て替えをしてほしい」、「いろいろ壊れている所があり危険と感ずることがある」という意見もあり、その要望については担当課で危険箇所の確認を行いました。生徒から直接の声をいただく機会となりました。

今後も生徒の生の声を直接聞き、共有できるこの取り組みを継続し、さらに発展した会となるよう計画していきたいと考えております。

その他の取り組みとして、中学生を対象とした大田市中学校職場体験を毎年実施しております。今年度も8月、9月にそれぞれ3日間、市内事業所にご協力いただいて体験を行っております。体験後にはすべての生徒の感想、自己評価などを各学校で取りまとめ、生徒の取り組む姿勢などを次年度以降の職場体験に繋げることができるように実施しています。以上で説明を終わります。

【意見交換】

梶野 市長

それでは意見交換に移りたいと思います。今日はできればみなさんに2回ずつはお話ししていただきたいと思っています。1回目は、先ほど説明があったことに対するいろいろな思いでも良いですし、普段思っておられることでも良いです。2回目は、それを深掘りするようなかたちで進めたいと思います。この会は、結論を得る場ではありませんので、普段思っておられることを率直に言っていただければ良いと思います。よろしくお願いします。

梶 教育委員

本日のテーマは、こどもたちの意見を取り入れる学校教育、そして地域づくりということになっておりますが、学校と地域との関わりについて、現行の指導要領では教科の独自目標を達成するということだけではなく、よりよい学校教育を通してよりよい社会をつくるとい

うこと、そのためには、学校と社会が同じ目標を持って連携しながら、よりよい社会のづくり手となる力、いわゆる人材を育てていくことが求められていると謳ってあります。

よりよい社会をつくるとか、よりよい社会のづくり手を育てるということが、前面に出されているというわけです。地域との関わりの中で育てていきたい力というのは、学校教育と同じ「生きる力」ですが、その中心となるのは、こどもたち自身が課題を持って解決の方法を考え、こどもたち同士で意見を言い合い、そして解決していくという問題解決の力であるということになっております。そのためには、こどもたちが自分の意見を言うことができる力を学校や地域で育てていくことが大切ではないかと思います。それをよくあらわした活動例がありますので、初めにそれを紹介して、私の話を終えたいと思います。

私が住んでいる井田地区で行われる牛の共進会に、温泉津小学校の1、2年生が参加しています。こどもたちは、単にメモを取り、インタビューをするだけではなく、大人がする審査とは別に、こどもたち自ら賞を考え、審査を行い、表彰式まで行うということをやっています。これだけの活動をするにはそれなりの準備が必要になると思いますが、関係者にお聞きしましたら、学校と地域のコーディネーターの方たちが集まって、いろいろと相談をし、共進会のご協力もいただく中で、こどもたちが学校の話し合い活動の中で自分たちのアイデアを出し合って賞を考えて、賞状やメダルを作ったようです。私は、この学校での話し合いの時間というのは、ものすごく大切な時間ではないかと思っています。話し合う内容が決まったらこどもに任せて、意見を出し合わせて、計画を立てさせる。それを実行させ、達成感を味わわせ、振り返りをして、次につなげていく。教師は、見守りながら適切な支援を行っていく。その過程でこどもたちのやる気が育っていくと思います。当日だけではなく、話し合いの段階からこどもたちは本当に楽しかったのではないかと想像します。それぞれの立場でしっかりと考え、準備した成果ではないかと思います。共進会に牛を出された方のお宅に伺って話を聞いたのですが、その牛舎の入り口に賞状と特製のメダルが、簡易なメダルではありましたが、しっかりと大切に掛けてありました。楽しんでこどもたちが作ったという跡がしっかりと見えました。

もう一つ、この地域では「井田っ子クラブ」といって、長期休業中に、まちづくりセンターで地域の方と作品を作ったり、料理を作ったりする体験活動を行っております。この地区は、学校が統合してバス通学をしており、普段はこどもたちの姿が見られない地区なのですが、長期休業中には、センターの方、地域の方、保護者やこどもたちが集まって意見を出し合うような、そんな催しを進めておられるということです。こどもの中にも、きっとこの地域の存在が心に残って将来の思い出になっていくのではないかと考えています。まさにこどもたちの意見を取り入れる学校教育、地域づくりではないかと考えております。

岩谷 教育委員

先ほど梶委員さんが言われたことは、本当に同感です。大田市内では各学校、各地域において、こどもたちの意見を取り入れた活動が既に行われていると思います。私が勤務していた学校でもそういう例はたくさんあって、それをさらに一歩進めていく必要があると思っています。

こどもたちは、保育園や小学校低学年の頃に地域に探検に出かけて、生活科で地域の方と触れ合い、関わる活動をします。それから、中学年の総合的な学習、社会科が始まり、地域を知るということで、地域の人たちと関わりあいながら、地域のいろいろな行事であるとか、

いろいろな人々を知っていく活動があるのですが、そこで一步進めて考えたいのは、中学年の「知る」の中にある「地域の課題を知る」ということを、学校側も意識する必要があるのではなかろうかということです。単に地域の良さを知るだけでなく、その地域の良さとともに、その地域を今後どのようにしていきたいのかということを実際に考えておられる地域の方と関わり合うことで、私が住んでいる地域では何が課題となっているのかということ、小学校中学年ぐらいで知って意識していくことが大事ではないかと思います。それから高学年の総合的な学習や社会科の中で、中学年で知った課題をどう自分たちが考え、解決していくことができるのかというカリキュラムを組む必要があるのではないかと思います。どうしても例年やってきたことの繰り返しになってしまいますので、一步先へ進めることができなかつたと感じます。これは自分自身が実践してきたことの反省です。去年やったことと同じことをするのは簡単ですし、楽ですので、どうしてもそこに流されてしまっていたという、これは自分の教員時代の反省です。そうではなく、毎年こどもは違うのですから、こどもが感じた課題を、例えば、高学年のこどもたちが地域の人と関わり合いながら、素敵なスイーツを作る体験でも良いし、特産物を作る体験でも良いのですが、何か自分たちの出来ることをやって、それを地域の方が取り上げてくださることで、成功体験へとつなげていく。地域の特産物を自分たちで作るといった体験を通して、中学、高校に進んだ時に、更に、この地域をどのようにしていきたいという意識を持って、こどもたちが生きていくのではないかと常に思っています。以前勤めていた志学小中学校では、そのようなことを保育園、小学校の頃から15歳になるまで実践しています。最後は、志学大好き活動といって中学3年生のこどもたちが発表するのですが、わさびアイスというものを作って夏休みに三瓶で販売したこどもがいました。そういう活動を通してその子は、地域を愛することとともに、その地域をこれからどのようにしていこうか、わさび田をどのようにしていこうかという問題意識を持つことができたということを発表していた記憶があります。そのようなことをどんどん進めていき、こどもたちが地域に何か投げかけると、それを大人の人は真剣に考えてくれて、取り上げてくれるんだというような、地域とのつながり、行政とのつながりができてくると良いと思います。

もう1つ、以前、鳥井小学校にいた時のことだと思うのですが、地域の議員さんに教室にお越しいただき、議員さんと6年生のこどもたちが、これから鳥井はどうしていけば良いかという話し合いをした記憶があります。こどもたちの言うことですので、些細なことだったのですが、その時の議員さんたちが、もう何十年も前の事ではありますが、本当に真剣に考えていただいて、ご自身の考え方に取り入れたいと言ってくださいました。そういうことを、少し言うだけでこどもたちは目を輝かせます。そういう地域や行政との関わりについて、今後、いろいろと整理しながら進めていけたら良いなと思っています。

景山 教育委員

本日はこどもの意見を取り入れて地域や教育をより良くしていこうというテーマですが、実際には意見を取り入れていると思います。これをより良くしていくためには、今よりもっと多くのこどもたちから、もっと多くの意見を聞くことができる環境をつくり出すことが優先事項であると考えています。

先日開催された拡大生徒会に出席させていただきました。多く出ていたのは繋がりというキーワードでしたが、他にもイベントというキーワードが強く心に残りました。意見は多く

ありませんでしたが、そのように感じました。今の中学生は小学生時代にコロナの影響を受けており、イベントが軒並み中止になった世代だと思います。そのため、どこかで人と人との対面的な繋がりを求めているように感じています。その中で特に、これができたら良いと思ったのが、他校と一緒に体育祭をする、競技大会をするということです。実現することが出来たら、イベントの中で他校の生徒と触れ合うことで、生徒自身がいろいろな気付きを得ることができる、いろいろな考えを持つことができる、そのきっかけとなるのではないかと思います。大規模な学校の生徒が、小規模な学校の生徒の意見を聞いて、改めて自分たちの地域の良さに気付くことができるのではないかと思います。そのようなイベントを続けることによって横の繋がりが生まれ、小・中学生から多くの意見が出るのではないかと思いますし、その意見を教育ビジョンにも反映していくことができれば良いと思っています。

楫野 市長

ありがとうございました。コロナの影響は4、5年くらいでしょうか。この間に、こどもたちがどう育ったのか、どういう環境で、何を悩み、何を経験したのかということを意識する必要があると、景山さんからの指摘によって改めて思いました。ありがとうございました。

次に宮里さん。地域でいろいろな活動をしておられる観点からお願いします。

宮里 教育委員

ホットなニュースですが、先ほどスイーツの話が出ておりましたけれども、温泉津小学校の6年生のアイデアであるスイーツ開発を形にしようということで、3月9日に私が所属している温泉津女子会と一緒に夢を叶えました。

秋に小学校の発表会があったのですが、その発表会で、こどもたちが「大田市の未来と自分の夢を語る」というテーマで、小中学校統合、人口減少や空家対策等、大田市の課題について、自分たちでパワーポイントを作って発表しました。その発表内容が、こどもたちはこんなことを考えているんだという本当にしっかりしたものになっていたもので、地域の者として、考えているアイデアを何とか形にしてあげられないかという思いが強く芽生えました。こどもたちの思いに本当に感動したので、本気で動こうということで、その中の提案の一つにあった「おいしいスイーツを作って、大田市をPRして観光客を誘致したい」という考えのもとで動き出しました。発表はイラスト1枚を使ったものでした。「観光客を呼ぶには、おいしいものを開発して人を呼ぼう」という企画で、イチゴを使うことだけはわかるものの、他に何を使ってどんな味であるとか、そのようなことは一切わからないのですが、これだけの情報を頼りに、ガトーサンマリノさんに協力をしていただき、大田市をPRするなら大田市の食材を使ってやりたいということで、大田産のイチゴと、大田産の牛乳を使って開発をしていきました。私たちが勝手に盛り上がりすぎてしまっただけで、こどもたちが置き去りになってしまいますので、小学校の先生方の協力で授業の時間を取っていただき、女子会と6年生で話し合う時間をつくっていただいたり、スイーツのネーミングをこどもたちに考えてほしいということで、宿題でそれを出していただいたりもしました。また、私たちが参加していない授業でも、こういう思いで、こういう名前をつけたんだというふうに、こどもたちがネーミングのプレゼンをしてくれました。そのようにして地域の人と一緒に商品化することができました。3月7日に記者会見を行い、メディア対応も6年生にさせていただきましたが、この時にすごいと思う感想がありました。それは、「自分たちの発表が地域のみなさんに響い

て、協力してくれたことがうれしかった。大田を動かすのは大人だけではなく、こどもたちも頑張っているの、こういう形で夢が叶っておいしいスイーツができてうれしかった。」というもので、この言葉を聞くことができて本当にやってよかったと思いました。

学校での活動は時間がなくてたいへんだということはわかっているんですが、地域には熱い人間がたくさんいて、関わりたいと思っています。今回のような時間を作っていただきながら、何とか、地域と学校、企業が一緒になって関わることをできたらいいなと思いました。こどもたちは、こういう体験を通して自分の住んでいる町に愛着が沸いたのではないかと考えています。地域の人と関わることで熱量が伝わったと思うので、一生の思い出になったら良いと思っています。今日は、試食として市長にも持ってきておりますので、また後ほど食べてみてください。

楯野 市長

いろいろな新開発の商品をいただくのですが、食レポは難しいんですよ。まずいとは言えない。おいしさをどう伝えるかが難しい。

次は仲野委員お願いします。

仲野 教育委員

今年の拡大生徒会に参加させていただきましたが、こどもたちのいろいろなアイデアがあって、各学校ともすばらしいと改めて思いました。一方で、これを言いつばなし、聞きつばなしにしないためにはどうしたら良いのかということは、教育委員会として、今後、こどもたちの提案に対してどのように取り組んでいくかということを考えていかなければならないと思います。

先ほど景山委員もおっしゃったように、このような意見を今後、地域の教育ビジョンにどう盛り込んでいくかということは大きな課題であろうと思います。

先般、小規模の中学校の卒業式に出席し、とても感動して帰ってきました。何に感動したかということ、卒業生の子の話なのですが、その子が弓道をやりたいと希望したため、学校、先生方、地域のみなさんで、それを実現するためにいろいろな取り組みをされたというようなお話がありました。宮里さんも言われましたが、こどもたちがやりたいと思う希望や願いを地域の人たちがどのように受け止めて、それを実現させてあげるかということが、とても重要なことだと思います。実際にこどもたちのアイデアを形にしていくことが、こどもたちの自己肯定感を高めることに繋がっていくと思います。そのような学校づくりは重要であると思いますし、そういう意味では、今回は学校教育となっていますが、これは後でお話ししたいなと思っていますけれども、実は学校運営をどのようにしていくかということにも関わっていくと思っています。

楯野 市長

ありがとうございました。それでは、武田教育長お願いします。

武田 教育長

皆さんの話を聞いていると、それぞれの地域において、地域の人とこどもたちが新たな魅力を作ってくださっているということを、この場だけでも感じることができました。そうい

ったことは、その地域だけのこととして温めるのではなく、例えば教育フェスタの場で、自分たちの地域でこんなことをこどもたちと行ったという実例を出し合うとおもしろいのではないかと感じました。それをさらに地域の大人たち、関係者、あるいは直接の関係者でなくとも良いので、話を聞いて、もっとこんな風にしたらおもしろい展開ができるのではないかという話になると良いと思います。新しい教育フェスタの種をいただいたと思いました。

先ほど事例がいくつか出ましたが、私が思っていることの一つとしては、例えば天領さんの実行委員は大人ばかりだと思いますが、こどもたちを実行委員に入れてみてほしいと思っています。他には、彼岸市の時にこどもたちのお店を出してみることも考えられます。石見銀山協働会議として行っている活動なども、こどもたちで1年間一つのプロジェクトか何かに携わり、お金もいくらか使えるようにして、大田市の魅力を発信するような取り組みをしてもらうようなことも考えられます。

至る所で町民運動会がなくなり、それに併せて行っていた学校の体育祭がなくなりつつありますが、こどもたちが地域の人たちとみんなでスポーツを楽しむイベントを作っていくことができないか、地域の皆さんがこどもたちを巻き込んで、元気を生むようなことができないかと考えています。

実は昨日、ふるさと教育の担当者から1年間の反省点について聞きました。今年は各学校で日本遺産、世界遺産に焦点を当てて取り組んでいただくよう計画していましたが、結局、地域との連携がうまくできなかったようです。これが課題であるとされていました。もし可能であれば、まちづくりセンターの皆さんが集まる年度当初の機会に、日本遺産や世界遺産に関するこどもたちの活動を説明してはどうかと思っています。それによって、自分たちの地区の学校はこんなことをするんだということが分かり、それをもとに、まちづくりセンターとしてこういう人を繋いであげることができるとか、こういった資料が用意できるとか、こういう講座があるから聞きに来てみてはどうかといった、現在は点の活動になっていることを繋げることができるのではないかと思います。

みなさん、一生懸命やってくださっているの、うまくリンクしていくと面白いものになっていくと思いますし、もしかしたらそれによって、これまでやってきたことで必要なくなるものもあるかもしれません。一方でその活動ひとつですべてができて、そこへ注力することができるのではないかと思います。

こどものふるさと教育をずっと進めてきましたが、先ほど吉田課長の説明にありましたアンケート結果の中にこどもたちの声がありました。学力調査の中にもあります。私たちはふるさとへの愛情を育もうと取り組んできましたが、こどもたちの、自分のふるさとはずごく良いところであるという気持ちは、県よりも上回っています。行事にも積極的に参加しているんです。

ただし、こどもたちに関するデータの中で下がってきている数値があって危惧しているものがあります。それは、ふるさとにとって何が大事かということのを改めて考えて、それに対して自分は何ができるかということについて考えるという項目の数値がとても下がっているんです。これは、先ほど述べたいくつかの事例と同じように、その点を後押しして下さる地域の方の発想や行動などがあれば、こどもたちは自分たちで本気で考え、意見を出していくことができるように、育っていくのではないかと思います。

楯野 市長

皆さんの話を聞いていると、やはり子どもたちは活躍できる能力もあるし、子どもたち自身がそう思っています。問題は、その機会を大人たちがどうつくってあげるのかということころ、そこが一番の課題だと思います。武田教育長が言われましたが、私も今感じているのは、コロナ禍の5年を経て地域の伝統文化が少しずつ弱まっているということです。運動会がなくなる地域も出てきていますし、地域の伝統文化も止めていく方向に向かっています。一方で、頑張っただけを継承しようとする地域もあります。地域の実力差というか、取り組みの差が、その地域にある学校に影響を与えているのかなと感じました。逆に言えば、学校サイドからどういう働きかけをするのが良いかということになります。学校は、学習指導要領によって取り組みを進めますが、地域とコミットしていくという部分をもっと重要視するような指導要領の解釈の仕方も必要だと思います。学習指導要領は変えることができませんので、これをどう読み込んでいくのかということになります。総合学習であるとかいろいろありますけど、その中で地域をコミットする時間を生み出していく努力を学校側にお願いしたいと思いますし、地域は、その時間をうまく利用し、子どもたちのアイデアや思いを実現する機会をつくってあげることが必要なのではないかと感じさせられました。

話は大きく変わりますが、私は昭和の人間ですから、子どもたちは守るべきものであるという意識の中でずっとやってきましたので、これまで県職員として、そして市長としてやってきた中で、子どもたちを一人の人間として尊重する姿勢は必要だと思いつつも、心の中では、未熟な子どもたちにどこまでさせていいのだろうかという、この自己矛盾を抱えながら実はやっています。私も自分の子どもたちを育てる時に、進路については、子どもたちに自分自身でどうしたいのか判断するようにと、ある意味突き放した経験があるのですが、一人の子だけは15歳の春で別れるのが辛くて止めた子がいます。その子は15歳の春で自分の行きたい道を進みたかったのですが。

最近、安来高校女子バレー部の4人が表敬訪問してくれました。一中と二中の出身です。女子バレーボールは、一中と二中が県大会決勝であたって、野球は一中と二中が決勝戦を戦い、そして二中は全国制覇をするという活躍がありました。スポーツにおいては、黄金世代です。大田の学校にはこのような中学生がいます。女子バレーの一中と二中の生徒のうち4人が、3年間一緒に暮らしながらやっていました。ずっと長いですね、この4人は。そして、全国大会の春高バレーでベスト8だったんですが、この4人が全員レギュラーなんですよ。6人中、4人が大田の子なんです。すごいでしょ。しかも、そのうち3人が大学では教育課程を目指しています。そのうちの1人は、教員になって帰ってくると言ってくれました。その次の週には、北陵高校吹奏楽部の3人の訪問がありました。これも全国大会に出場。吹奏楽とマーチングで全国大会、銀賞と銅賞を受賞して帰りました。1年生が2人、3年生が1人なんです。3年生の子が島大の教育学部に行って音楽の教員になって帰ってきますと言ってくれました。私はものすごくうれしくて飛び上がりそうになりました。教育長はすぐに全員採用しますと言っていました。採用するのは県なのですが。そのくらいうれしかったんです。みんな高校進学で15歳の春で、自分のやりたい道を選び、そして安来高校の4人は親元を離れて育っていったんですよ。そういった道を選んで活躍する姿を見ると、私が自分の子を止めたのは失敗だったのではないかということを思ってしまう。子どもたちの育ちを、我々大人が後押ししてあげることがいかに大事なことであるかを感じとった出来事です。

ここからは2回目の発言となりますので、今と大きく話が変わっても結構ですから、皆様のご意見を伺わせてもらいたいと思います。では、先ほどとは反対に仲野委員さんからお願いします。

仲野 教育委員

今日は市長の思い出話も聞くことができ良かったと思っております。

まず一つ目に、市長が言われました学習指導要領の読み取り方については、とても重要であると思っております。総合的な学習の時間の中で改めて取り組むのも良いですが、例えば教科の中で意識付けをするという考え方もあります。今はあるのかわかりませんが、例えば6年生の国語で「町の幸福論」というものがありました。私も温泉津小学校の銀山学習に関わって、最終的な落としどころを町の幸福論という形でお話しさせていただいたのですが、あのよう教科の中で、町のことを考えることもできると思うんですね。そういった意味では、教育委員会として、各学校において、どういう教科でどんなことを教えられるのかということについて整理していく必要もあるのではないかと思います。

もう一つは、いきなり地域づくりということではなく、学校運営に子どもたちが主体的にどのように関わっていくことができるかということが重要だと思います。学校の自治ということで子どもたちが関わるということです。前回の拡大生徒会の中でも、いろいろなアイデアや、各学校の課題が出されていますが、もっと子どもたちが学校の課題を出し合っていくということが必要ではないかと思います。委員会活動なども体育部や保健部や図書部など、我々の時代とほとんど変わっていませんが、今は必ずしもそれに当てはまらない様々な解決すべき課題や、取り組むべきことがあると思いますので、そういった視点から既存の委員会で良いのかということや子どもたちが議論していくことも必要であると思います。自分たちが生活している学校をどのように良くしていくか、その意識付けをすることが、結果的に自分たちの住む町をどのようにしていくかということに繋がっていくのだと思います。初めから地域づくりに参加していくという形でなくとも、自分たちの身近な学校をどうしていくかということを考えることから始めたら良いと思いますし、学校運営協議会に子どもたちが関わっても良いのではないかと思います。

楯野 市長

ありがとうございました。次は宮里委員さんお願いします。

宮里 教育委員

市長からこのテーマをいただいて、私がすぐに思い描いたのは、大森町の子育て環境と地域づくりです。以前から、大森町の子どもたちが、大人と同様に地域づくりに関わっていること、自分の考えを主張する発言がしっかりとできることに対して、なぜ、このような子どもたちが育つのだろうかということにとっても興味がありましたので、児童クラブの松場さんにラブコールを送って、支援員として児童クラブに入らせていただきました。もう1、2年経ちますが、そこで感じることは、幼少期からの子どもたちの意見を大人が受け入れるということが重要であるということです。子どもたちの意見を取り入れるといっても、小学校へ上がった意見が言えない子どもたくさんいるんじゃないかということを、松葉さんや園長先生と話していましたが、本当に一人一人の子どもたちの意見を取り入れていくためには、小さ

い時から自分の考えを受け入れてもらえる環境がなければ、意見を言えるこどもたちが育たないのではないかと考えています。

大森町ではルールを決める時に、こどもたちが子ども会をしてルールを決めているんです。その様子を大人からみると、こうやってやったらまとまるのにと考えてしまいますが、大人はサポートをするだけでこどもたちがルールを決めているので、やらされているのではなく、自分たちが決めたルールを自分たちで守り、それによって問題が起きた時は、これではだめだったから変えようという話し合いをする。こういう場が設けられていることで、1年生から6年生までしっかりと発言できる子が育っていくということが分かりました。

地域性もあるかもしれませんが、小、中、高校だけではなく、保育所の時から、そういった子育て環境が家庭でも保育所でもできると良いと思います。あとは、ふるさと教育の時間がとても大切だと思います。先ほど、市長がお話しされた、帰ってくるよと言われたこどもさんのことも、ふるさと教育があつてこそだと思いますので、この時間は削らないでほしいと思っています。

梶野 市長

ありがとうございます。大森町については、NHKで取り上げられたことで全国区にもなっていますが、これまでの地道な取り組みというのがあって今があります。私も簡単ではなかったであろうと感じています。しかしながら、他の地域でも同じようなことができると思っていますので、今から始めても遅くないと思います。ありがとうございます。

景山 教育委員

私は、鳥井町に住んでいますので鳥井町に関して少し紹介をさせていただくと、鳥井町ではイベントに参加する中学生の割合が高いと思っています。これは中学生に与えられた地域での役割があるからだと思います。

例えば盆踊り大会であれば、中学3年生が運営と一緒に携わることになっています。会議などにも参加しますし、当日も受付などをします。そういったこともあってか、毎年参加率が高いです。運動会についても同じような関わりを持っており、できる限り続けていきたいと思っています。運動会は、小学校がなくなると継続することが難しくなると思いますが、盆踊り大会は続けて、中学生の活躍の場を作っていきたいと思っています。実際、大人が動いている姿を見ることは、貴重な経験だと思っています。

話は変わりますが、こども施策の中で、すべてのこどもというキーワードがたくさん出てきますが、これは普通学級のこどもだけではなく、特別支援学級や養護学校のこどもにも当てはまるものだと思います。実際のところは、そういったこどもや保護者が、現時点において意見を堂々と言うことができるかといえば、そうではないと思います。養護学校や特別支援学級という枠組みの中だけであれば言えることもありますが、ここに掲げてあるように意見を言うことができるのかという点と難しいと思います。これを変えるには、大きな話にはなりますが、大田市全体にノーマライゼーションの考えが普及しなければ、そこまでには至らないと思っています。心のバリアフリーであるとか、きれいな言葉は普及していますが、実際のところはまだまだであると感じています。我々はそのような視点も持たなければならぬと感じております。

楯野 市長

ありがとうございます。そのことは必要であると私も感じています。一部ではなくすべてのこどもたちですから。行政では全てを取り残さないという言い方をしていますが、本当にそのようになっているのかと、私も自問自答しながらやっております。やはり、まず意見を聞くこと、その実態を知ることが大切であろうと思っています。意見を聞くところから始めていかなければ何も解決していかないだろうと思います。学校教育の中でもインクルーシブなんて言ったりしますが、要するに、特別支援学級を分けて配置するのではなく、同じ教室で一緒に学ぶこと、そういう考え方も出てきています。その場合は何が良いのかということについては、これから様々な検証がなされていくことだと思いますが、そのためには教員の体制なども変えていく必要がありますので課題も多いと思います。全てのこどもたちが一緒に学び活動する環境、そしていろいろな人たちと一緒に活動する環境、いろいろな人たちと考えを出し合うことができる環境、そのような環境は必ずつくっていかねばならないと考えております。では、岩谷委員さんお願いします。

岩谷 教育委員

今回の話を聞きながら、私の頭の中で思い浮かんだのは、大田市の学力育成プロジェクトです。指導を受けていた斎藤先生にお話を伺いましたが、その時に斎藤先生が繰り返し言われていたのが「こどもを信じること、それに尽きるよ。」ということです。毎回のようにそのことを言われていました。「こどもは生まれた時から学ぶ力を持っているんだから、教員はそばに寄り添って、しっかり見守り、こどもの方向性を見極めてあげることが大事。こどもを信じる、この一言だね。」とおっしゃったことが、頭の中に浮かんできました。自分自身の子育てや、自分が何年かやってきた教育を、その言葉に照らし合わせて考えてみると、私自身は特に子育ての中でこどもを信じるということが、できていなかったんだなと思いました。先ほどの市長のお話を聞きながら、そう思いました。本当に時代が目まぐるしく変わってきています。自分の子どもが親になって子育てをする様子を見ると、例えば高熱が出た時の対処の仕方ひとつをとっても、昔はとにかく薬を飲ませなさい、冷やしなさいと言っていましたし、すぐに病院へ連れて行っていました。コロナ禍以降は、すぐに病院に連れていくのではなく、しばらく様子をみてからという考え方になってきています。病気の対応の仕方ひとつにしても、こどもの育ち方にしても、大きく変わってきていますので、これから教育に携わるものが考えていくことにおいて大事なことは、まずはこどもを信じること、そしてこの先、どのように世の中が変わっていくのか、寄り添う教員も大人もしっかりと学び続けて、こどもとともに考えながら学んでいくことであるということを改めて感じました。

楯野 市長

ありがとうございました。どうしても未熟であると思ってしまうんです。我々大人が支援して導くという上から目線のような考え方にどうしてもなってしまうがちです。先ほどの話で、成長力を支援していく、一緒に学んでいくということが、我々大人にとっても大切だと感じました。

梶 教育委員

仲野委員さんからは、こどもたちが学校運営にどう関わっていくことができるか、こども

の自治活動をどのように育てていけば良いかというお話しがありました。

宮里委員さんからは、スイーツを作った時の感想から、自分の考えを受け入れてもらえるということがとても大切だというお話しがありました。

景山委員さんからは、盆踊り大会での中学生の役割についてのお話しがありました。

それから、岩谷委員さんからは、こどもを信じることが大事だというお話しがありました。

それらを自分なりに繋げてみると、地域と繋がる意見を言うことができるこどもたちを育てるために、学校の中での話し合いの時間があるんですが、それが大切であると感じました。正確には話し合い活動という時間があるんです。皆さんの頃は学級会と言っていたと思います。この時間こそが、こどもたちが地域とつながる源になる時間ではないかと思っています。最近はそれぞれの学校が力を入れていますので、いろいろな考え方ができるこどもたちが育っているのだと思っています。その話し合い活動といわれている時間では、学級内の諸問題、お楽しみ会の計画、児童会、生徒会、学校行事や、先ほどもありました地域との交流などで学校に関係のあることなどを話しますが、ここで大事なことは、みんなに出番をつくることです。司会班も輪番制にして、どの班も司会に当たるようにするとか、また司会班の中でも役割を固定せずに、みんなが司会をしたり書記をしたり、いろんなことができるように配慮することが必要です。どんな意見でも否定をされない、そのように発言しやすい学級の雰囲気をつくっていくことが鍵になります。議題はみんなで決めていくのですが、自治の範囲を超えない議題をこどもたちに考えさせるということが大事なんです。なぜかという、途中で先生がストップをかけてしまうと、こどもたちは発言しなくなってしまいます。話し合いに入ったら、こどもたちに任せるとすることが大事なんです。任せられない議題としては、例えば金銭に関わるものであるとか、健康、安全上の影響があるようなことであるとか、相手を傷つけるなど人権上問題のあるようなことで、そのようなことは初めから外しておいて、全部をこどもたちで話していいんだよということを伝え、とことんこどもに任せて、計画・実行させ、そして達成感を味わわせる。このような体験をさせていくとこどもたちは、いきいきと意見を言って活動できるようになるんだろうと思います。授業の中でも、このことをうまく使っていけば、こどもたちが自分たちでしっかり授業を受けるようになりますし、先ほどの拡大生徒会でみられたような、各中学校の堂々とした姿に繋がっていくのではないかと思います。学校でも取り組んでおられると思いますが、今後、益々その部分に力を入れていけば、皆さんがおっしゃったようなことに繋がると思います。

梶野 市長

ありがとうございました。では教育長、お願いします。

武田 教育長

梶委員さんが言われたことについてです。実は今、とても興味関心が高いドキュメンタリー映画で、「小学校～それは小さな社会～」という、山崎エマさんが9年間かけて温めた、小学校の1年間をずっと追いかけた映画が、世界のいろいろなところで高評価を受けています。日本の教育のすばらしさについて称賛されているのです。映画では、1年生か2年生だったと思いますが、低学年のこどもが自分の学級を仲の良い学級とするために歌を作っていました。その歌の歌詞をみんなで考える場面や、隅の部分の箒の使い方など掃除の仕方を先生が教える場面、給食の配膳の仕方を見せる映像などが出てきます。

監督の山崎さんは、この日本の教育のすばらしさを様々な国に伝えたいと思って映画を作ったということです。山崎さんは「自分は様々な国に行っているが、日本の教育には価値がある。なぜならば、外国はすぐ“個性”を言い出して、早いうちからその子の個性を磨こうとするが、日本は、まず土台としてコミュニティーの力をつける。例えば、みんなで力を合わせる。困っている人には手を差し伸べる思いやりを育てようということ。更には、学校行事や委員会活動などを通じて、少し自分たちにはハードルが高いことであっても、みんなで乗り越えようということ。それらのことが意図的であるかはわからないがたくさん散らばっている。それが素晴らしい。その上で、自分の個性って何だろう、自分らしさって何だろうということをして10代から20代にかけて考えていけば良い。」という考えで映画を作ったと言っておられました。

その話があったので、校長先生方に、今もそういった活動がなされているかということを知りました。なぜならば、このところ、学校現場での働き方改革が前面に強調されてきましたので、学校では十分なことができていないのではないかと考えたからです。私が地域に後押ししてほしいと思っているところはその部分です。いろいろな発想があり、こういうやり方が良いという考えがあったとしても、今は学校としてもそれを受け入れにくい状態にあり、私としても心苦しく思っています。

しかしながら、お話を聞いてみると、児童総会や生徒会などでは、例えば体育館の使い方のこと、全校で遊ぶ時のことや制服のことなどについて話し合いを大事にしているようです。ある校長先生が、教員がこれだけ少なくなったら、こどもを学校運営に参加させるしかないと思っていると言われました。まさにそれが求められているのではないかと思います。現状では、様々なことを大人が決めるものだという考え方がはびこっています。だから、こどもにチャレンジさせる気持ちであるとか、新しいものに取り組む気持ちを感じさせるために、きっかけを与えたいと言っておられました。例えば、遠足の行き先をこどもたちに考えさせるとか、大谷翔平のグローブの使い方をこどもに考えさせるとか、そういうことをやっていますと言われました。ただし、そこには発達段階や年齢などの要素がありますので、教育者としては、何のためにどういう目的でそのことをするのかという視点を与えるということが必要だと思いました。

そういう配慮をしているという話を聞いて、私はとても安心しました。先ほど、拡大生徒会の今後についての話がありましたが、私が最初に生徒たちに言ったのは、「みんなは学校の代表だから、それぞれ集まって交流しましょう。そうしたら、新しい発想が生まれてくるんじゃないかと思ってこれを始めました。」ということ、次には、「ある市役所の部署から、『これをみんなならどう考えますか。』』というようなテーマが出てきたとして、それを自由にみんなで話し合おうという、この拡大生徒会がそういう場になっていけばと考えたことがもうひとつのきっかけです。」というあいさつをしました。そういう形で進めていけたらと思います。これまでの拡大生徒会に対するこどもたちの意見で、大きなものが3つありました。1つは、色々な活動を聞いて自分の学校をより良くしたいという思いが湧いてきたということ、2つ目は、こんな学校が大田市にあって色々な取り組みをしているから、もっと交流すれば楽しそうだということ。もっと交流したいと生徒たちは言っています。私は、これをこどもたちの声として現場に届けたいです。校長先生はじめ先生方も、学校として考えていただき、交流の場を生み出していただきたい。3つ目は、地域と繋がりを持って何か貢献したいということです。この3つでした。驚いた意見としては、こういう機会で学校のことを知

ると、自分は小さな学校の生徒だけれども、大きな学校へ行ってもやっていけるという気持ちが湧いてきたと言った生徒もいます。つまり、統合だとか再編だとか、こちらでは言っていますが、こどもたちの中にもいろんな意見を聞きたいという思いがあり、聞くと自分の中でやれるという気持ちが湧き上がるんだという体験を、あの場でしてくれたんだと感じました。一方で自分たちの学校の魅力も再認識したと言ってるんですよ。それもすばらしいことだと思いました。それが、先ほど景山委員がおっしゃったように、言葉がなかなか紡げない、自分の思いをしっかりと語れない子や特別支援のこどもたち、そういったあらゆるこどもたちに機会を与えるように結び付けることができたと思います。拡大生徒会という場に出てきて、議場に来て、こんな所へ自分は来た、最高の思い出になった、楽しかったと言ってくれた各学校の生徒会のトップが、その思いで、各学校で何かを始めてくれることを心から望んでいます。そのひとつのきっかけとなったらと思います。大事なことは、大人がこどもたちに対して、小さい、幼いということではなく、確かに重ねた年齢は私たちより少ないけれども、市民の一人であり、学校の主役であるということを、しっかりと自分たちで認識すること。そして、意見をきちんとしたかたちで伝え、それに対して大人たちが誠意をもって回答していくこと、あるいはそれらの意見の見える化に手を貸すことがとても大事であると思います。

楯野 市長

そろそろ時間が迫ってまいりましたが、これだけは言っておきたいということはあると思いますか。

私も、皆さんの様々な話を聞いて、本当に今日は良かったと思っております。こどもが真ん中という言葉が最初の説明にありましたが、私も初めに話しましたように、これからの地域を担うのは今のこどもたちです。世界に羽ばたく人もいるでしょうし、地域に残って地域を盛り上げていく人もいます。そういったこどもたちが、地域に誇りを持って健やかに成長することを願っております。

先ほどの、学校運営協議会にこどもたちを参加させるという仲野委員の話がありましたが、その実現に向けて、ぜひ教育委員会でご議論いただいて、できることから良いと思いますので、やっていただければ良いと思っています。

私の中での大きな課題として、市が設置している色々な審議会や委員会がありますが、例えば総合計画等の審議をしていただくのは、団体の長たちに来ていただくことが多くなってしまうのですが、そうすると男性だけになってしまいます。これではよろしくないということで、私が市長になってからは、審議会の目標を女性が全体の40%になるようにしています。県の目標は50%です。年齢層も大きく下げて、若い方に参加していただきながら計画などもつくってききましたし、様々な審議会、委員会を女性の参加率40%ということで進めておりまして、まだ40%は達成できていませんが、30数パーセントくらいにはなっています。委員会によっては、なかなかその業界に女性がいらっしやらないというものもあります。今度は、ここにこどもを入れるということを真剣に考えていかなければなりません。ここが課題です。学校生活との兼ね合いをどのようにするのか。例えば、小、中、高校生からそれぞれ一人。男女それぞれとすれば二人ずつ。それぞれ審議会に来てもらって、こどもたちから意見を言ってもらいたいと思っています。それと学校行事との兼ね合いをどうするか。休みの日にやれば良いという考え方もありますが、参加しやすいやり方をどう考えていくかというこ

とが課題です。あるいは、審議会に参加するのではなく、また別のやり方とする考え方もあります。今の拡大生徒会は、あのような形で行っていますが、前から懸案事項とされているのが、こども議会ですね。そのようなことも言われていますので、そういったこどもの意見を聞く機会をどう担保していくのかということについて、行政としても大きな課題を突きつけられています。我々も我々として、市役所の中で言うことは言いますし、教育委員会としても、学校の中でどのようにしていくかを真剣に考える良いスタートアップになったんじゃないかと感じております。

それでは良い時間となりましたので、このあたりで終わりたいと思います。今日は、ご意見ありがとうございました。それでは、事務局にお返しします。

【閉会】

森部長

皆様方には、様々な角度から貴重なご意見を賜ったと思っております。この場にいらっしゃる方だけではなく、今日いただいたご意見をまとめまして、学校、庁舎内、まちづくりセンターなど、色々な地域等に情報提供し、それぞれの取り組みの参考にさせていただきたいと思っています。まずは、そこから取り組んでいきたいと思っています。

本日の大田市総合教育会議は以上をもちまして終了とさせていただきます。ありがとうございました。

議 事 録 確 認 書

会議名：令和6年度第1回 大田市総合教育会議

日 時：令和7年3月13日（木）午前10：00～11：30

場 所：島根県立男女共同参画センターあすてらす 3階 研修室1、2

大田市長 楫野 弘和 様

大田市教育委員会が調整した上記会議に係る議事録に記載された議事内容について確認しました。

令和 7 年 6 月 26 日

大田市教育委員

梶 伸光

大田市教育委員

仲野 義文

大田市教育委員

岩谷 律子

大田市教育委員

髙山 浩純

大田市教育委員

宮里 陽子